

**研究テーマ：発達障害をもつ児童への支援の確立、および少～青年期の支援研究**

研究代表者（職氏名）：教授 土田 玲子

連絡先（E-mail等）：

tutida@pu-hiroshima.ac.jp

共同研究者（職氏名）：講師 伊藤 信寿、助教 引野 里絵

**はじめに：**（軽度）発達障害児・者の抱える困難は、特に外部には見えにくく、他者から理解されにくい。また彼らの持っている能力が比較的高いことから、適応を期待される社会（学校・職場）は通常の社会であり、彼らの困難について配慮されている環境ではないことが多い。さらに支援システムの整備は諸外国に比し、かなり遅れており、彼らは環境としての社会に不適応を起ししやすい状況にあるといえる。そこで、少～青年期における発達障害児・者の社会適応にむけての支援方法に関する研究が緊急な課題であるといえる。

**研究目的：**小～青年期における発達障害児・者に対する集中的な発達支援、および生活適応に向けた指導を可能にする支援方法を検討する。そのために集中キャンプを試行し、その効果について検討する。

**対象：**県立広島大学三原キャンパスクリニックで指導を受けている発達障害児・者

**研究方法：**牧場の暮らしを中心にした1週間の集中キャンプを行い、その効果について 参与観察、 保護者、スタッフのアンケート調査を行い検討する。

**研究経過：**2007年度予備研究として、牧場の暮らしキャンプを提供する琉球インフォメーションセンター、琉球リハビリテーション学院との打ち合わせを行った。この企画に男児8名、女児1名（年齢11歳～19歳）の参加があり、12月23日～29日沖縄東村にて牧場の暮らしキャンプツアーを試行した。（引率 土田、伊藤）この活動の反省を踏まえ、2008年に重点研究として本研究を開始した。5月に雲南 TRC および沖縄 TRC、沖縄琉球リハビリテーション学院を打ち合わせで訪問し、8月に雲南 TRC にて1泊乗馬キャンプを男児6名、女児1名の参加を得て試行、さらに9月には沖縄キャンプ参加者を募集し、男児10名、女児4名の参加申し込みがあった。10月には参加者説明会およびグループ活動を行い、11月の参加者乗馬体験を経て12月23日～29日に沖縄でのキャンプを引率土田、伊藤、引野およびボランティアセラピストとして3名の応援を得て実施した。プログラム概要は以下の通りである。23日：広島空港出発 沖縄到着後現地スタッフと合流。車で移動。沖縄博物館見学。牧場到着後学生ボランティアと顔合わせ。24日～27日：朝6時起床。6時半馬の餌さやり。7時朝食。8時馬の手入れ、掃除。9時～12時 乗馬個人レッスン。12時昼食。14時～16時（24日みかん狩り、25日カヤック、26日ムーチャーづくり、運動会、オリエンテーリング、27日沢登り）。18時夕食、歌、踊り、クリスマス会等。28日6時起床、6時半馬の餌さやり。7時朝食。8時馬の手入れ、掃除。9時海岸までトレッキング、海辺で昼食。夕食後キャンドルの明かりの中で馬についてのQ&A。20時ホテルに移動。29日9時美ら海水族館見学、買い物後空路広島に帰宅。

**予備研究を生かしての修正点：** ボランティア学生を固定し、担当制にした。（メリット：子どもとのラポート、理解が進み、変化も観察できた。デメリット：体力的にハードになった。） 子どもを3人ずつの小グループに分け、各々セラピストがリーダーとしてついた。（メリット：子どもの特性に応じた対応がよりきめ細かく可能となり、学生と子どもとの関係をより丁寧に観察す

ることができ、より細かなフィードバックが可能となった。) 外部からセラピスト(他大学の講師、助教等)がボランティアとして支援に入った。(メリット:発達障害を持つ子供たちの理解や支援の方法を研修する機会を提供できた。ボランティア学生へのフィードバックも含め、OT教育のあり方について考える機会を提供できた。デメリット:参加児の理解について、セラピストとしての指導力についてグループ差が出る可能性がある。) ボランティア学生も交えてケース会議、反省会を持った。(メリット:担当児についてより深い理解、およびキャンプで起きている事柄、狙い等について理解が進んだ。デメリット:夜遅くまで会議が行われるため、体力的な負担が大きかった。) 教育の一環として、ボランティア学生に午後の活動の企画と運営を行ってもらった。(メリット:OT学生として、作業の治療的利用の実践的学習ができた。デメリット:活動企画の学生は子ども担当の学生と分けたため、子ども理解が不十分で、活動内容が子どものニーズに合わないものもあり、大きな修正が必要となった。子どもにリピーターが多く含まれていたため、初日のプログラムを変更した。(メリット:博物館見学は、沖縄の自然や歴史を学ぶいい機会となった。デメリット:最終日の買い物体験の時間が十分とれなかった。) 新たに牧場の暮らし最終日の夜、寄田氏を囲んで子どもたちとのQ&Aセッションを行った。(メリット:子どもたちの豊かな好奇心、興味を引き出し、良い学びの場となった。) ホテルで子どもたちの部屋ごとに責任を持たせて、入浴、荷物の整理を行わせた。(メリット:キャンプの最終日でもあり、グループの凝集性ができており、子ども同士で支援しあう様子がよく観察された。)

**スタッフの反省、感想:**短い期間で子供達の大きな変化が沢山見られた。見えにくい生活面の支援の必要性を目の当たりにし、親御さんの大変さを実感できた(かばんの整理、私物の管理・・・常に声かけが必要だった)。こだわりや過敏性を持っている子供が多いにもかかわらず、支援があればそれなりにキャンプ生活が出来ていた。子どもの自然に遊びを生み出す力や遊び道具がなくとも自然の中にあるものを使って遊びを展開できる力を目の当たりにした。昨年参加し、「ぜひまた来たい」という目標のためにアルバイトやお手伝いをしてお金を貯めて参加している子どもがいるとの話が印象的であった。余暇スキル、その後の就労スキルにつながる基礎がこのキャンプには豊富に仕込まれていた。馬にただ乗るだけでなく、世話をする中での接触、馬や人とのコミュニケーションなど、馬を中心としてトータルでのセラピーの意味があることを学んだ。自然がいかに人の生活に重要であるかを学んだ。クリニックの関わりはほんの一側面でしかなく、子どもが実際に生活している場面に関わる必要がある。自然に恵まれ、ある程度自由度がある環境の中で、子どもたちは遊びを創り、生き活きし、自由に遊ぶ中で、他者に対する意識が芽生え、集団としてまとまっていく。興味がある作業を共有することは、仲間意識の芽生えに繋がる。子ども達の食事やコテージでの生活面に関して、保護者の気持ちが少し理解できた(片づけない、時間を気にしない、物をなくす、忘れる...等)。その一方で、課題となる作業が上手く出来るように、具体的に戦略を立て、一緒に行うことで、本人の意識が変わってくることも感じる事ができた。初めて乗馬療法を目の当たりにし、自分の乗馬療法へのイメージが大きく変わったただ乗るだけでなく馬の暮らしに関わる様々な活動が、作業療法の視点で教育的治療的に活用できることができることを学んだ。各リーダーが子供へ色々な見方や対応をしていることをミーティングで聞いたことが、非常に勉強になった。教員として、教科書的な教育ではいけないという事をあらためて確認できた。自分が実体験を通じて学んだことをリアルに教壇で伝えていきたい。